

「逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え」

text: 渋澤 健

第④回 「令和時代の覚悟」という変革



逆境の時こそ、力を尽くす

コロナ禍により、経済社会の多くの常識が「破壊」され、また、日本の人口動態の壮大な激動による新しい時代への門が開いている最中で、新しい国家運営体制が発足しました。

岸田総理は「新しい資本主義」を国家ビジョンとして掲げられています。当初、報道は「分配」というキーワードに着眼しましたが、正確に言えば、「成長」が「分配」され、「分配」が更なる「成長」へとつながる「好循環」を目指しているのと同じように理解しています。『論語』が「分配」、『算盤』が「成長」と解釈しても良いかもしれません。

『論語と算盤』が出版された1916年(大正5年)という時代背景において、渋沢栄一は危惧していました。このままで良いのか。封建国家であった日本が明治維

新を経て、やっと手に入れた豊かな社会が脅かされるのではないかと。急速に富を得た事業家が「一夜大尽」「成金」と呼ばれるような時代でした。また、明治時代と比べると生活が著しく向上し、現状に満足している事なかれ主義の一般市民も目に付きました。

このような時代背景で、栄一は、『論語と算盤』で大きく声を上げました。「大正維新の覚悟」が必要であると。

「維新ということは、湯の盤の銘にいう『有に日に新たなり、日に日に新たに、また日に新たなり』という意味であるから、澁刺たる氣力を発揮するときは、自然に生まれたる新氣力を生じ、進銳の活動ができるのである」

一見、好景気に見えても、明治維新の前後にあった社会の気迫が、50年ぐら

いの年月を経ると失せていると栄一は嘆いていたのです。

また、渋沢栄一は危惧していました。「明治維新以来の事業中には、失敗に帰したのも有ったが、多数の事業は非常なる元氣と精力とをもって、駁々として発展し来たので、他に種々な原因あったにしろ、元氣と精力の偉大なるものである」

今の時代の表現を用いれば、「前例がない」「組織に通らない」「誰が責任を取るんだ」と同じような社会的風潮が、栄一が提唱していた「大正維新の覚悟」の時代でもあったようです。

「今日の状態で経過すれば、国家の前途に対し、大いに憂うべき結果を生ぜぬとも限らぬのであることを思い、後來、悔るがごとき愚をせぬように望む

のである」

維新が無き大正時代の後に訪れたのは昭和時代でした。渋沢栄一が亡くなったのは昭和6年11月11日です。その2カ月前に満州事変が起こります。日本は、大いに憂うべき結果生じた、悔やむごとき愚の時代に突入し始めたのです。

当時の絶好調の経済社会であっても「維新」が無ければ将来の行方に重大な課題があったということであれば、現在の生温い経済成長がずっと続いている時代では尚更、「維新」が不可欠でありましょう。

日本の「新しい資本主義」には「令和時代の覚悟」という変革の気迫が不可欠です。